論文審査の結果の要旨

氏名　石井　菜穂子

本論文は一国が持続的経済成長軌道に乗るための制度条件を特定し、制度と持続的経済成長の関係性を定量的に分析し、停滞している途上国における制度に関する政策提言を試みようとしたものである。

本論文は 6 章より構成される。第 1 章と第２章では世界における所得格差の状況を歴史的にレビューし、世界規模での一人当たりの所得格差の発生と拡大は産業革命以降の約 200 年間に生じたことを明確にする。既往研究、とりわけ新古典派成長論の分析枠組みや、比較制度分析の成果や社会的な仕組みにも着目した理論・実証研究をレビューし、本論文の中核的分析視点である「成長メカニズムが機能するための環境条件としての制度」に着目して本論文の分析枠組みを規定している。

第３章では、現代経済成長をもたらした産業革命の伝播の歴史を辿ることによって、成長に不可欠な以下の制度を特定する：①その国の発展段階に適した技能を備えた労働者を育てるシステム（人的資本)、②技術を自国の発展度合いに合わせて適切に選択、吸収、開発する制度（技術革新力)、③市場アクセス・コスト軽減のためのインフラ構築（インフラ整備)、④投資に対する成果を保証する経済取引制度（経済制度)、⑤より多くの国民が経済取引に効果的に参加するための政治的・社会的安定（社会的結合力)、さらに⑥戦略を立て利用可能な資源を効果的に結び付け、制度整備を行うリーダーシップの存在（ガバナンス)、である。本論文ではこれらを『制度のミニマム・セット』と定義する。

第４章は本論文のハイライトである。「持続的成長軌道に乗れないのは『制度のミニマム・セット』が備わっていないからである」という仮説を回帰分析手法によって検証する。104 カ国に関して、特定された 6 つの制度の成熟度を数値化する。このために世界規模で実施されている企業家へのアンケートをベースとしたデータを活用する。回帰分析の結果、①持続的成長軌道に乗るためには、特定された６つの制度が備わっていることが重要である、②６つの制度のバランスが重要であり、未発展な制度がある場合にはそれが持続的成長への隘路となる、という推計結果を得る。さらに、制度間の補完性を分析し、「人的資本」と「技術革新力」との間に、また有意の程度は落ちるが、「人的資本」と「社会的結合力」、「インフラ整備」と「経済制度」の間にも補完性があるとの結果を得ている。また低い発展段階の国のグループでは「人的資本」と「インフラ整備」の重要性がとりわけ高く、中位国グループになると「技術革新力」の重要性が最も高くなり、高所得グループになると再び「人的資本」ついで「経済制度」が重要になるという結果が示された。一方、著者も指摘しているように、制度の概念自体の曖昧さ（とりわけ社会的結合力やガバナンス）や定性的制度の数値化に伴う問題、また被説明変数は一時点での一人当たり平均所得を用いており、長期成長率を用いていないことなどに留意が必要であると銘じている。

第５章では、特定された６つの制度を六角形で表現し、その凹凸によって、当該国にとって相対的に欠如している制度が視覚化される。

最後の第６章では、分析の結果として、最も未成熟な制度に開発努力を集中させることを提言する。一方、著者も指摘しているように、制度と経済成長は双方向作用であることに留意すること、また未発展とされた制度を歴史的な経緯に遡って理解し、複合的な相互作用の中でその制度の発達に最も効果のある政策手段の検討に留意するべきこと、なども併せて指摘している。

本論文は、産業革命後の世界各国における持続的経済成長と制度の特徴を検討することによって、一国に長期的経済成長をもたらす重要な条件として、６つの制度からなる『制度のミニマム・セット（人的資本・技術革新力・インフラ整備・経済制度・社会的結合力・ガバナンス)』を特定化した。加えて、これらの制度と持続的経済成長の相関性をクロス・カントリーで定量的に分析し、①持続的成長軌道に乗るためには、ミニマム・セットが備わっていることが重要である、②ミニマム・セットがバランスよく発達していることが重要であり、未発展な制度がある場合にはそれが持続的成長への隘路となる、ということを明らかにした。加えて、制度間の補完性の分析結果も提示している。これらの知見は既往研究には見られないオリジナリティの高いものである。今後、これらの制度に関するデータの改良と蓄積が行なわれれば、開発途上国の制度改革と持続的経済成長の議論をさらに深めるという発展性も期待できる。また、発展段階別や地域別にみた『制度の六角形』は当該国の開発優先課題の選択や関連する政策検討に実務上の有益な示唆を与えるものと期待できる。以上のことから、本論文は、博士（国際協力学）を授与するに値するものと認めることができる。